

異世界転生令嬢、
出奔する②

猫野美羽
Miu Nekono

Regina
BUNKO

登場人物紹介

CHARACTER

フェロー

ダンジョン都市の
東の冒険者ギルドの
受付主任。

ミヤ

ナギたちが依頼を
こなす中で知り合った
ハーフドワーフ。

ラヴィル

ダンジョン都市で
活動する白兔族の冒険者。
見た目によらず武闘派。

ミーシャ

ダンジョン都市で
宿屋『妖精の止まり木』を
営むエルフ。元冒険者。

ナギ

『アリア』という辺境伯
令嬢に転生した元OL。
前世の記憶を思い出し、
チートスキルを手に入れた。
美味しいご飯を
こよなく愛している。

エド

奴隷商から逃げてきた
黒狼の獣人。
馬のように大きな
狼の姿、ボメラニアン
のような仔狼の
姿にもなる。

目次

異世界転生令嬢、
出奔する2

書き下ろし番外編

メイドカフェ・ナギ

異世界転生令嬢、
出奔する2

異世界転生令嬢の出奔事情

十歳の誕生日、アリア・エラントル辺境伯令嬢は前世の記憶を思い出した。階段で足を滑らせて死んでしまった、日本人アラサーOLの工藤渚。それが、アリアの前世。

そうしてこの異世界に転生したものの、歴史ある王国の貴族令嬢なのに、義母と義姉に虐げられ、実の父親にも無視されていたアリアは、屋根裏部屋で病に臥せていた。しかし、渚が死んだのは手違いだったからと、前世の記憶を思い出すと同時に魂の管理者から授かったスキルを駆使して、アリアはどうか生き延びることに成功する。

アリアが入手したスキルのひとつ【無限収納EX】は、特に規格外の性能を誇っていた。収納量は無制限、空間内では時間が停止し、生き物も収納可。

そんな最強の収納スキルを手にしたアリアが願ったのは、自由。

それと、美味しいご飯と快適な生活だ。

亡き母の遺産やアリアが受け継ぐはずだった財産を【無限収納EX】に放り込み、彼女は辺境伯家からの出奔を決意する。準備は万全。名前を「ナギ」と改め、隣国を目指して冒険の旅に出た。

国境に跨り魔物の巣窟と恐れられている大森林で、ナギは黒狼族の少年を拾う。

怪我を癒し、食事をして元気になった獣人エドマンド——エドは、前世の渚の後輩、江戸川秋良の記憶を持っていた。普段は黒狼獣人のエドだが、【獣化】のスキルを使って狼の姿に変化すると、その精神は「アキラ」と交代する。

大きな黒狼の姿と愛らしい仔狼の姿を取ることができる彼は、ナギの頼もしい相棒になった。

「命大事に楽しく快適に！」をモットーに、彼らは一緒に生き抜くことを決意する。

大森林を抜け、辺境伯邸から持ち出した家財を売り払いながら、二人と一匹は自由を求めてダンジョン都市を目指した。

そこから二ヶ月以上かけてようやく辿り着いたのが、ダリア共和国。

四つのダンジョンに囲まれた首都『ダンジョン都市』を拠点に、ナギとエドは冒険者になるべく見習い活動を始めた。

美しくも大食漢なエルフの女将が経営する宿『妖精の止まり木』でお世話になりなが

ら、二人と一匹は見習いとして活躍する。

森での採取に魔獣の討伐。獲れたお肉はもちろん、美味しく調理する。

エルフのミーシャ、白兎族の女性冒険者ラヴィル、冒険者ギルドの受付主任フェローに見守られながら、ナギはエドと時々アキラと一緒に異世界生活を満喫している。

「私たちが幸せになることが、きつと最高の復讐！」

元辺境伯令嬢だとバレないよう、ナギは男装して過ごしている。

規格外なスキルの存在が知られると厄介ごとに巻き込まれそうなので、なるべくひっそりと二人だけで活動するつもりだ。

お金を貯めて自分たちだけの「家」を手に入れるため、今日も二人は冒険者見習いとして、ダンジョン都市で励んでいる――

第一章 出奔令嬢は冒険者見習いを頑張ります

ダリア共和国は亜人種が多く住む多民族国家だ。

六つのダンジョンを保有する国の首都はダンジョン都市と呼ばれる。

うち四つのダンジョンがちょうど東西南北の方向に位置していたため、中央部の平野に拠点を築き、四角く強固な塀で囲った都市を作り上げたのだ。

都市を守るために築かれた塀の出入り口は四つ。ダンジョン近くに砦を設置し、そこに門を作った。北の鋳山ダンジョンのそばには北の砦、南の島ダンジョンには南の砦という風に、四方にそれぞれ砦がある。

ナギとエドが大森林を抜けて一路目指したのが、この東の砦だった。

東のダンジョンは通称、肉ダンジョン。豊かな森林フィールドがそのほとんどを占めており、食用の魔獣や魔物が多く現れるダンジョンとして名を馳せている。

数万単位の住民が暮らすダンジョン都市の食の多くを支えているのが、この東のダンジョンだ。

「美味しい魔獣肉がたくさん狩れると噂の肉ダンジョンに挑戦できるのは、冒険者だけ。一刻も早く昇格して挑戦したいね、エド」

腰までの柔らかな金髪を丁寧に編み上げて、トレードマークとなったハンティング帽を被ると、ナギは背後に付むエドを振り返った。

既に身支度を終えていた黒狼族の少年は「そうだな」と神秘的な面持ちで頷く。

彼には自前の獣耳があるため、帽子は不要。お気に入りの黒一色の装束に身を固めて、ナギの準備を見守っていた。

ナギとエドがダンジョン都市に辿り着いて、既に一週間。特例で認められた二人は、それぞれ冒険者と荷物持ちの見習いとして、東の冒険者ギルドで依頼をこなしている。通常、冒険者は十五歳の成人にならなければギルド会員にはなれない。だが、十五歳未満でも、レベルが40以上なら特例で見習いとして仕事を請けることができる。

十歳のエドは現在レベル42。この制度を利用して、冒険者見習いになった。

また、貴重な収納スキル持ちかつレベル20以上であれば、見習いポーターとして仮のギルド会員に登録が可能。そのため、レベル21で同じく十歳のナギも無事に見習いのポーターとして認められている。ただし、非力なナギにはエドの同行が必須だと、東のギルド受付主任のフェローには念押しされていた。

見習いの二人が正規の冒険者になるには、ギルドからの一定の評価が必要だ。

街中での奉仕と街の外での薬草採取や魔獣の討伐など、ギルドを介した依頼をこなさなければならない。依頼を達成すると相應の点数がつき、依頼人の評価が高ければ、更にボーナスポイントが付与される。

そのため、二人ともこしばらくは真面目に冒険者ギルドで見習い会員用の依頼をこなして、点数を稼いでいるところだった。

街中での奉仕依頼は、前世のボランティア活動と似ている。

二人の初仕事は水路の掃除だったが、街中での掃除仕事は不人気な常設依頼として掲示板にいつも貼り出されている。

民家の草むしりや煙突の煤落とし、そのついでに子守り依頼など、内容は多彩だ。これらの常設依頼をこつこつこなして信頼に足る人物だとギルドで評価されると、今度は手紙や荷物の配達依頼が回されるようになる。他にも、計算が得意なら商店の手伝い、料理が得意なら調理場の手伝いなど、色々な仕事を斡旋してもらえるらしい。

ナギは【無限収納EX】から取り出した手鏡で髪がきっちり帽子の中に収まっているのを確認すると、革製のリュックを背負った。

「お待たせ、エド」

「ああ。行こう」

定宿にしてある『妖精の止まり木』の部屋を後にして、二人は冒険者ギルドへ向かう。二の鐘が鳴るのは午前九時頃。割りの良い依頼を求める冒険者たちはとくにギルドを発っている時間帯だ。見習いが出向くには少し遅い時間ではあるが、今日は常設依頼を請ける予定なので、急ぐ必要はない。

「エド、常設依頼は何があったか覚えてる？」

「採取依頼は、薬草と珍しい種のキノコ。あとは毒蛇の捕獲依頼だな」

記憶力の良いエドは昨日の待ち時間の合間にしっかりと依頼書を確認していたらしい。

「毒蛇の捕獲？ それ、いったい何に使うの……？」

恐ろしい依頼内容に眉を顰めるナギに、エドが苦笑する。

「毒蛇の毒は危険だが、その毒を中和する薬を作ることまでできる。薬師ギルドが毒消し薬の作成のために常設依頼を出しているだけだから、怖がることはない」

「そうだったんだね。ビックリした……」

「生け捕りすると良い値段で引き取ってくれるらしいぞ？ ナギには難しいだろうから、俺が捕まえる」

素手で捕まえる気満々の少年から、ナギはそっと視線を逸らした。うん、無理。遠く

から魔法で倒すだけならともかく、毒蛇を素手で捕まえるなんて、一生できそうにない。

「私は薬草とキノコを狙うことにする」

「そうだな。採取はナギに任せる。ベリーの他にも果実があればいいんだが」

「岩のそばの森が採取場よね？ スライム退治の時にベリーは見つけたけど、他の果樹は見かけなかったわ」

大森林と比べると、岩近くの森は物足りなく感じてしまう。豊かな資源に恵まれた大森林は魔素——生命や魔力を構成する根源——が濃いため、植生が多様で賑やかなのだ。もともと、魔素が濃い場所には魔獣や魔物も多く棲むため、人が暮らすには過酷な環境だ。安心と安全を求めた結果、人は魔素の多い場所から離れた地を拠点としている。

大森林には及ばずとも、森の魔素は少なくとも街中よりは濃いため、薬効成分のある植物や草食の魔獣を得ることはできる。

「今日は果物を宿へのお土産にできれば良いな」

「そうだな。なければ、ブラックベリーを持って帰ろう」

北の王国よりはダリア共和国のほうが果物の価格は安く、手に入れやすい。それでも、一般人には魔素の濃い美味しい果物は贅沢品にあたる。

冒険者が採取すれば手に入るが、収納スキル持ちがいないと大量に持ち帰るのは難し

い。儲けを考えると、持ち帰る量が多くなる採取依頼よりも、魔石だけで達成証明ができる討伐依頼を大抵の冒険者は選ぶ。そのため、果物は供給が少ないのだ。

よって、ダンジョン都市では果樹園農家から仕入れた果物が多く流通している。（それを考えると、野生の果物の採取って実は結構儲けられそうなのよね。魔素が濃くて美味しい果実となると、ダンジョン産に限られそうだけど）

もちろん自分たちで消費する分を優先するつもりだが、余分に採取できたら、ギルドに買い取ってもらうのも良いかもしれない。

そんな風にのんびりと考えながら歩いているうちに、冒険者ギルドに到着した。

煉瓦造りの頑丈な三階建ての建物が、東の冒険者ギルドだ。剣と盾の紋章が刻まれた看板が掲げられており、分かりやすい。

スイングドアを押して中に入り、見習い冒険者用の依頼掲示板に向かった。じっくりと依頼書の中身を確認すると、常設依頼書を二枚剥がし、受付カウンターに提出する。

「おはようございます。この依頼をお願いします」

「あら、ナギくん？ おはよう。先日はクッキーをありがとう。とても美味しかったわ」
カウンターにいた女性職員は垂れた耳が可愛い犬族の獣人で、にこにこ優しい笑顔で受付処理してくれた。髪と耳は明るい茶色で、どこことなくミニチュアダックス

フンドを彷彿とさせるチャーミングな女性だ。胸元の名札によると、名前はリア。

（クッキーを食べたってことは、大森林で獲った素材の処理で残業になってしまった職員さんか……。申し訳なくて、ナツクッキーを差し入れたのよね）

「薬草採取と毒蛇の捕獲依頼ね。毒消し薬はちゃんと持っている？」

「はい！ 薬もポーシオンも持っています」

「そう。なら、気を付けて行ってらっしゃい」

「行ってきますー！」

「行ってくる」

受付嬢のリアに手を振り返して、ナギは上機嫌でギルドのスイングドアを押し開けた。お手製クッキーを褒められたのが嬉しくて、その足取りは軽い。

砂糖を使わずに小麦粉と蜂蜜とナッツ、卵と少しのバターだけで作ったクッキー。

自分ではしっとり感の少ない、やや残念な出来だと思っていたので、手放しで褒められたのは嬉しい。

「そういえば、ナギの【治癒魔法】は毒にも効くのか？」

リアに指摘されて不安に思ったのか、エドに訊ねられた。

「うん、たぶん大丈夫だと思う。前世の記憶を取り戻した時、病気で死にそうになっ

いたのも【治癒魔法】で治せたのよね。後から考えたら、あの時の病状は食中毒の可能性が高かったから」

アリアの記憶を遡^{さかのぼ}ってみると、変な臭いと味のするスープを食べてから、嘔吐と下痢に苦しんだ覚えがある。そこから一気に体力が落ち、肺炎をこじらせたのだ。

【治癒魔法】でどれも回復できたので、おそらく解毒も可能はず。

「ポーシオンや毒消し薬があるのも本当だから、安心してね？」

「……それも辺境軍の備品か？」

「んっふふふ。内緒だよ？ 私たちには必要ないかもしれないけれど、ちゃんと応急処置用の救急セットも用意してあるから、エドは安心して蛇を捕まえてね？」

笑顔でお願いする。鱗^{うろこ}や模様を見るだけなら綺麗だと思うが、本物の蛇を触れと言われたら、ナギは全力で逃げるつもりだ。普通に怖い。

(同じニヨロニヨロ系のウナギはむしろ大好物なんだけどなー?)

「エドは蛇が平気なの？」

「小さな子供の頃から、よく捕まえていた」

「まさか食べて……？」

「いや、蛇は不味いから食わない。慈養強壯の薬になるから、村の薬師のばあさんが買

い取ってくれていた。良い小遣い稼ぎだった」

「子供のお小遣い稼ぎが蛇獲り……」

さすが異世界。幼少期から逞^{たくま}しい。

不味いから食べない、の一言は聞こえない振りをしたナギだった。

砦^{とりで}から徒歩三十分。森の中は相変わらず静かだ。他の冒険者や見習いの姿も見えない。大森林とは比べものにならないが、それなりの広さはあるので、分散して採取しているのだろう。

森の入り口周辺の密集地は全て採取された後らしく、薬草^{ぐすり}の類は見当たらなかった。

「少し奥に入ろう。蛇は湿気の多い場所を好むから、水辺を中心に探したい」

「分かった。私は薬草を探すね。魔獣を見つけたら、倒してもいい？」

「ああ。討伐依頼としてはまだ請^うけられないが、素材は買い取ってもらえる」

「じゃあ、美味しいお肉は積極的に狩ろう。レベルを上げたいから、弱めの魔獣を倒すわ」
これまでナギは遠距離から魔法や魔道具を使ってしか、魔獣を倒したことがない。武器で直接攻撃をしたことは一度もなかった。

りたい。ダンジョンという不思議な亜空間では何が起こるか分からないのだ。特に武器を使えない今のナギは、魔力不足で魔法を使えなくなったら、ただの非力な十歳の少女でしかない。

(いざとなったら【無限収納EX】内の小部屋に逃げ隠れることはできるけど……他の人に、生き物どころか自分自身も収納できると知られたら厄介だもの。なるべく使いたくない)

自衛のためにも武器を扱えるようになっておくべきだろう。

「短槍で、まずはスライムから」

「悪くはないと思う。ただし、油断はするな」

「大丈夫。結界の魔道具は常に発動しておくし、ポーションもポケットに入れてあるから！」

安全マージンは決して怠らない慎重な少女の言葉に、エドは仕方なさそうに笑う。

森の奥で見つけた沼地周辺で、二人は採取を開始することにした。

依頼の出ている薬草は五種類。ポーションの素材となる魔力草、リポ草、ナミン草。鎮痛作用のある薬草はロキ草、イヴ草だ。それぞれ葉や茎、根に特徴のある薬草で、見分けるには知識とコツが必要だが、【鑑定】スキル持ちの二人には簡単な仕事だった。

薄い草の手袋を装着し、専用のハサミを使って採取していく。鎮痛薬の材料であるロキ草とイヴ草は根っこに成分があるため、スコップで慎重に掘り起こす必要があった。

「ここに生えている薬草の八割は採取できたね。二割は繁殖用に残して、と」

薬効が葉や茎、花の部分にある薬草は根を残して、丁寧にハサミで採取した。根が無事なら、一週間ほどで新しい葉が伸びてくる。根ごと採取する薬草の場合は、採り尽くしてしまうと絶滅する可能性があるため、採取時には二割を残しておくのが冒険者のルールだ。

採取した薬草は数えやすいように五束ずつまとめてカゴに入れておく。傷みが少なく、新鮮であるほどギルドでの買い取り額が上がるので、慎重に【無限収納EX】に収納した。前世日本人の生真面目な性分から、土まみれの薬草は浄化し、丁寧に扱うようにしている。おかげで、二人揃って素材買い取り部門での評判が良かった。

「【鑑定】スキルのおかげで、あつという間に終わっちゃった」

他の見習いたちのために、この場所で余分な薬草を採取することはやめておく。

代わりに食べられる野草やキノコを摘んでいると、周辺を索敵していたエドが戻ってきた。

「土産だ、ナギ」

無造作にぶら下げていた獲物を手渡される。首元に刃物の痕があり、綺麗に血抜きさ
れていた。

「これはボア？ 初めて見る毛皮の色ね。染めたみたい、綺麗な緑色」

「ワイルドボアより少し小柄な、フォレストボアだ。森林内に生息しているうちに、森
とよく似た色の毛皮になったらしい」

「身を隠すための獣の知恵なのね。魔獣にも保護色があるなんて知らなかった」

感心しつつ、フォレストボアを【無限収納EX】に預かっておく。

【鑑定】によると、ワイルドボアよりも身に脂が乗っており、肉はかなり柔らかいらしい。

「ステーキに良さそうね、フォレストボア。しゃぶしゃぶにも向いている肉質かも」

「シンプルに焼肉にしても旨いと思う」

「串焼肉にしたら、食べやすいかな」

うさうさと今夜のメニューを考えることに余念のないナギだったが、ふいにエドが低
い声を発した。

「ナギ。そのまま動くな」

「！」

動きを止めたナギの目前にしゅるりと頭上から縄のようなものが垂れてくる。

黒々とした鱗うろこを持つ毒蛇だ。どうにか悲鳴を上げるのは我慢できた。が、至近距離で
目が合ってしまった、ナギの顔から血の気が引く。硬直して逃げられそうにない。

そこへ音もなく近寄ってきたエドが、慣れた手つきで蛇の頭のすぐ近くを掴んだ。

全長五十センチほどの黒蛇はエドの腕に絡まって抵抗するが、あっさりと引き剥はがさ
れて麻袋に放り込まれる。

「ナギ、収納を頼む」

「……うん……」

ものすごく嫌だったが、仕方ない。指先だけで麻袋に触れて、急いで収納する。

【無限収納EX】スキルは無機物は目視収納ができるのだが、有機物は触れないと収納
ができないのだ。

「あの、さっきの黒蛇。私の【気配察知】スキルには全く反応しなかったのだけど……」
あんなに近くに危険な存在がいたのに、全く気付けなかった。これまで絶大な信頼を
置いていた【気配察知】スキルが役に立たないとは……

不安がるナギに、エドが思案げに首を傾げる。

「ナギは無意識に魔獣や魔物、あるいは人を対象に索敵しているんじゃないか？ そ
うだとしたら、索敵対象をもう少し広げればいい」

「対象を広げる……」

そういえば、同じ魔獣でもスライムは見つけにくかった。加えて、大森林にいた時は魔獣だけでなく、美味しく食べられる獣も、と意識して索敵していたことを思い出す。

「じゃあ、魔獣や魔物以外にも危険な動物を意識して……っと、うわあ……」

対象を広げてあらためてスキルを発動すると、途端に今いる場所が危険な森に見えてきた。

少し離れた沼のそばにはスライムが大量に蠢（うごめ）いているし、毒のある蛇や虫の気配が大量に伝わってきて、卒倒しそうになる。

「うう、ちよつと気持ちが悪いかも」

「対象範囲をもう少し絞ればいい。虫は結界の魔道具があれば寄ってくることはないから、除外してもいいだろう。先程の黒蛇も結界に阻（は）まれる程度の、弱い生き物だ。魔獣ですらない」

「あ、そうだ。私には結界の魔道具があつたんだ……。けど、気分的にものすごく不愉快だから、蛇に関してはどれだけ弱くても索敵に反応するようにしておこう……」

見つけたら、可及的速やかにその場から離れるために。

その間にもエドは淡々と毒蛇を捕まえていて、うねうね蠢く麻袋がナギの足元に三つ

ほど転がっている。

「ナギ」

「言われずとも、分かっているわよ……?」

ちよつと自棄（やけ）気味に、【無限収納EX】に麻袋を収納する。

時間停止する亜空間に隔離したので、ギルドでは生きのいい毒蛇を納品できることだろう。

「ふう……。しゃがんでばかりだと疲れるね」

「なら、スライムを狩ってみるか?」

「あ、それはいいかも！ 倒してみたい!」

スライムは魔獣の中で最弱と言われている。見習いでも余裕で倒せるため、スライムから採取できる魔石はとても安い。たしか、魔石ひとつで鉄貨一枚分の買い取り額。子供のお駄賃程度の金額である。

初心者が武器の扱いの練習相手にするには、ちょうど良い相手だ。

「じゃあ、リュックは片付けておこう。短槍（たんそう）を構えて、と」

「待て、ナギ。呼ばれている」

「え? 呼ばれているって、誰に……」

振り返った先で、エドの身体が溶けるように消えた。
足元に散らばった衣服の下から顔を出したのは見慣れた仔狼。落ちた服やリュック、武器などを足首に嵌めた収納魔道具のバングルに律儀に回収している。

呆然と己を見下ろしているナギに気付くと、仔狼——アキラは胸を張った。

『スライム狩りと聞いて！』

「聞いていたのね……」

ナギがちよっと呆れて返すと、仔狼が後ろ脚で立ち上がり、懸命に訴える。

『本当は薬草採りもしたかったんですよ？ でも、その身体じゃ薬草は採れないってエドに言われて諦めたんです。だから、せめてスライム狩りは手伝わせてください！』

「まあ、別にいいけど……。でも、私も練習したいから、交代だよ？ 狩り尽くさないでね」

『分かっていますって！』

機嫌良くお尻をぶりぶりと振りながら、小さな狼が率先して案内してくれる。

可愛らしい後ろ姿を眺め、ナギはのんびりとその後を追った。

この黒い毛色のポメラニアン——もとい、仔狼はエドが【獣化】のスキルを使って変化した姿だ。ナギを『渚センパイ』と呼ぶ彼はエドの前世、江戸川秋良の魂を宿している。

彼はナギの前世である渚が職場で新人教育を担当していた後輩だった。

本来、転生すると魂は浄化され、前世の記憶は残らない。けれど二人に前世の記憶があるのは、その死が魂の管理者のミスによるものだったからだ。

渚は百年の寿命を台無しにしたお詫びに、異世界での新しい人生を与えられた。前世の記憶あり、便利なスキル付きで。

アキラも数年の寿命が残っていたため、前世の記憶を抱えて転生しようだが、ナギの転生特典とは内容が大きく違っていた。

（転生した肉体はエドのもの。だけど、狼の姿に変化した時だけは、前世のアキラの精神が前面に現れる。性格は全く違う二人なのに、魂が同じなのって、本当に不思議よね……）

現代日本の若者らしく、アキラは明るく前向きな性格だ。飄々とした言動で軽い男と誤解されがちだが、仕事ぶりは真面目で丁寧だった。

渚と同じく、美味しいご飯とお酒が大好きな、気の合う同僚。それがアキラだった。対するエドは寡黙で生真面目。アキラの記憶から知ったフィクション寄りの『忍者』の生態に興味津々のようだが、当の本人の性質は『侍』や『武士』に近いと思う。

ゲームや物語としてのファンタジーを好んでいたアキラは異世界生活を満喫しているようで、前世での事故に巻き込んだ負い目のあるナギにとっては、それが救いでもあった。

スライム狩りだとはしゃぐ仔狼も込みで、エドには幸せになってもraitたい。

「えいつ！」

吐き出される酸の攻撃を避けて、ナギはスライムめがけて短槍たんそうを叩き付ける。

浄化槽のために保護指定されている青い魔石持ちのスライムを避けて、その他のスライムは見つけた端から倒している真っ最中だ。約束通りに仔狼のアキラと交代で。

ナギが槍やりを突き刺すと、次のスライムを仔狼の前脚がべちんと弾き飛ばす。猫パンチに似た攻撃だが、瞬殺だ。その可愛らしい前脚に、どれだけの力が秘められているのか。パン、と風船が割れるような破裂音と共に、その場に魔石が転がった。

「アキラは他にも攻撃方法があるの？ その猫パンチ以外に」

『猫パンチじゃないですけどもっ！ こう、前脚を振るうだけでも、離れた敵を倒せますよ？』

黒い毛玉と見間違えそうなほどに愛らしい仔狼が前脚をそつと動かす。傍目にはポメラニアンが可愛らしくお手をしたようにしか見えないが……

ビュオッ！ と風を切る鋭い音が鳴り、アキラの直線上にいたスライムが真つ二つに裂けた。コロんと落ちる魔石。



「えっ？ 今の何？ 全然見えなかった！」

『ふふん。すごいでしょ？ 爪の先から【氷魔法】を放って、スライムを切り裂いたんです！』

「すごいねっ？ こんなに可愛いのに、こんなに強いなんて！」

ナギは仔狼を抱き上げて、くるくると回って歓声を上げる。

こんなに可愛いのに、うちの子すごい！

『仮にも伝説の黒狼王こくろうおうに対して、この態度。渚センバイって度胸ありますよね……？』

「ん？ 何か言った？」

『いいえ？ あ、右手五十メートル先にフォレストボアのペアがいますけど、どうします？』

「速やかに確保！」

『了解！』

ぴょん、と少女の腕から飛び下りた仔狼は大きな黒狼へと姿を変えて、木々の間を駆けていった。

スライムを三十四、フォレストボア二頭を討伐したところで昼休憩を取ることにした。

湿気の多い沼地は落ち着かないので、場所を移動する。

少し歩くと、まとめて木を伐採した跡があり、そこを休憩場に決めた。

いつもならキャンプ気分でテーブルセットを取り出すナギだが、ちょうどいい大きさの切り株がいくつもあったので、それらを椅子代わりに使うことにする。

「今日のランチはお弁当スタイルだから、ぴったりね」

『お弁当？ いいなあ、俺も食べたい……』

「たくさん作ってきたから、アキラも食べる？」

『食べたいです！』

「良いお返事ね」

くすりと笑って、ナギは収納から昼食用に持ってきたお弁当を取り出した。大判のハンカチに包んだお弁当の中身はおにぎりだ。おにぎりはバナナの葉で丁寧に巻いてある。鼻の良い仔狼はもう中身に気付いたようで、忙せわしく尻尾を振っている。

「じゃーん！ コッコ鳥の炭火焼きを具にした、焼きおにぎり弁当です！」

『焼きおにぎりだーっ！』

わっふわふ、と興奮した様子で周囲を駆け回る仔狼に「待て！^{ステイ}」と命じて、ナギは切り株の上でそっとハンカチを広げた。

今朝、誰よりも早く起きて、宿のキッチンで用意した力作だ。焼きおにぎりは作り立てを収納したので、まだ温かい。なんとも魅惑的な香りを漂わせている。

「うん、美味しそう。お米も崩れていないわね。成功したようで何よりだわ」

『どうやったの、センパイ？ こっちのお米はバラバラだから、おにぎりは難しいって言うてなかった？』

「ん、後で説明するね。まずは温かいうちに食べちゃおう！」

狼の姿をしている彼に人間の食べ物は毒ではないかと心配だったが、獣人と同じで問題ないと一蹴された。特にアキラは毒耐性のスキルがあるため、玉ねぎもニンニクも美味しく食べられるのだと豪語していた。異世界のスキルは、つくづく謎だ。

一人で食べるのは寂しかったので、同じ食事を楽しむことは素直に嬉しく思う。

（まあ、何かあれば、すぐさま【治癒魔法】をぶっ放せば平気よね？）

バナナの葉を広げてやると、仔狼は夢中で焼きおにぎりにかぶりついた。

『んっ、美味しい！ 焼きおにぎりだ！ 醤油味で、ちよつと焦げたところが美味しい。中の焼き鳥も香ばしくて、すごく美味しい……っ！』

器用にも、食べながら【念話】で感想を伝えてくれている。

焼きおにぎりはあつという間に食べ尽くされた。大きめに握っておいたのだが、アキラにとっては前菜と変わらなかったようだ。

物足りなそうに、こちらをちらちらと見上げてくる。

「もう、仕方ないなあ。エドの分もあるんだから、お腹に余裕を持たせておいてよ？」

人格はふたつでも、胃袋はひとつなのだから。

作り置いていた焼きおにぎりと、ついでに甘い玉子焼きとソーセージを小皿に載せてやる。

『さすがセンパイ！ よく分かってる！』

「調子いいんだから」

とは言ったものの、おにぎりに玉子焼きとソーセージの組み合わせは最強だと、ナギもこっそり思っている。

ここに唐揚げとお漬物をプラスしたら、きっとアキラは感涙するに違いない。

「さて、私も食べようっと」

切り株に座り、膝の上でお弁当を広げると、ナギは手掴みで焼きおにぎりを頬張った。具の焼き鳥は甘辛いタレに漬けて炭火でじっくりと焼いてある。

炊き立てのご飯に刻んだ焼き鳥を混ぜ込み、焼きおにぎりにした。もちろん、おにぎ

りも炭火で焼き上げている。

「香ばしくて美味しい……」

我ながら、なかなかの出来栄えだと思う。

刷毛^{はけ}で醤油を塗って炭火で焼いたのだが、本当は味噌で焼きたかった。けれど残念ながら、まだこの世界では味噌を発見できていないので、しばらくは醤油味で我慢だ。

「ごま油を塗って焼いたおにぎりも美味しいのよね。どこかに売っていないかしら」

大森林で見つけたシオの実——醤油は、おかげさまで重宝している。

醤油を手に入れてから、焼き物、煮物に揚げ物と、料理の味は飛躍的に美味しくなった。「ソースや漬けダレも醤油をベースに作れたし。本当に、シオの実には感謝しかないわ」味噌とごま油も頑張って探せば、手に入れることができるかもしれない。

美味しい食生活を楽しむためにも、このふたつは是非とも手に入れておきたかった。

はむ、と焼きおにぎり弁当の最後の一口も咀嚼^{そじく}し、ナギはマグカップに入れたスープを味わいながら飲み干した。すまし汁も嫌いではないけれど、やはり味噌汁が飲みたい。

『センパイ、おかわりが欲しいですっ!』

「エドの分がなくなるから、これで最後ね?」

キャンキャン訴えるボメラニアン、もとい仔狼の前に追加のおかわりを出してやり、

その横にスープ皿も置いてやる。

お水のほうが良かったかな? と思ったが、幸せそうにスープを飲む姿にほっとした。

「おにぎりの具を変えたら、お弁当にも飽きがこなくて良さそう」

サンドイッチとバーガーもどきばかりのランチはさすがに少し飽きていたのだ。

出先では手軽に食べられるのがいちばんなので色々と工夫を凝らして作っていたが、肝心のナギ自身がパン食に飽きてしまった。

米を手に入れてからは、ランチに炒飯^{チャーハン}やピラフを作ってみたが、手軽に食べられるものとは言えず。

試行錯誤を繰り返した結果の、今日の焼きおにぎりだった。

『そういえば、あのパラパラのお米でどうやっておにぎりを作ったんですか?』

お腹が満ち足りたら、途端に疑問が再燃したようだ。

「お米をいつもより長く茹^ゆでて、柔らかめに炊いたのよ。そのご飯が温かいうちに片栗粉を少し混ぜるの。あとは普通におにぎりの形に握って、オリーブオイルとお醤油を塗って焼いてみました」

意外と簡単だった、と胸を張るナギを、アキラは大仰に褒め称えてくれた。

そのくらい、この懐かしい味に飢^うえていたのだろう。ナギも、成功を悟った時には大

喜びでおにぎりを頬張ったので、気持ちよく分かる。

「普通におにぎりを握っただけだと、やっぱり崩れやすいのよね。だから、焼き固められる焼きおにぎりにしてみたの。これが正解!」

「じゃあ、これからお昼はおにぎり弁当にするんですか?」

「んー。毎日だと飽きない? 基本はおにぎり弁当のつもりだけど、たまにパン系かな? でも、気分によってはバスタになります。なぜなら、私が食べたいから!」

「うぐぐ、センパイの気まぐれランチってことですか、ずるいです。けど、料理人の特権だから仕方ないですよ。俺も毎日おにぎりが食べたい……っ!」

ころころと地面を転がって悶えて^{もた}いる。駄々を捏ねているようだが、可愛いだけだ。ナギは微笑みながらローリング仔狼を見守った。

「俺、牛肉のしぐれ煮入りのおにぎりが大好物だったんですよ。もちろん定番のシヤケ、ツナマヨ、昆布も好きですけども!」

「ここは海が近いみたいだから、ツナマヨも焼きジャケも作れると思う。昆布はあるのかな? 明太子やたらこ味のおにぎりも作ってみたいよね」

指折り数えていると、いつの間にか仔狼がナギの膝の上によじ登っていた。そして、さらさらと期待に満ちた目で見上げてくる。その口の端から、たたりと……

「アキラ、よだれ……!」

『はっ、失礼! ごめんなさい、渚センパイ。なんでもするので、おにぎりプリーズっ!』

可愛らしく鼻を鳴らしながら擦り寄られると、陥落しそうになる。だが、ここは要交渉だ。

「うーん、そうだね。アキラが毎晩ブラッシングさせてくれて、時々その後頭部とか、ふかふかのお腹を吸わせてくれるなら……?」

『喜んで!』

「はやっ。あんなに嫌がってたのに、恐るべしおにぎりの魅力……!」

呆れるナギをよそに、仔狼は嬉し^{たじな}そうだ。そろそろエドと交代してあげなさいね、と窺めると「キャン!」と良い返事をして木立の向こうに消えていった。木陰で元の姿に戻るのだろう。

気を遣わせて申し訳ないが、目の前でエドに着替えられては落ち着かないので、そつと視線を逸^そらして彼が戻ってくるのを待った。

人型に戻りかつちり服を着込んだエドがナギの向かいの切り株に腰を下ろすと、ナギは新たな包みを取り出して渡す。

「これが、おにぎり。旨いな」

「口に合ったようで良かった。シンプルな塩にぎりも好きなんだけど、他にも色々試してみね。この身体になってからは具だくさんで濃いめの味付けが恋しくって」

これが若さというもののなか。

とりあえず、明日のおにぎりはアキラのリクエスト、しぐれ煮を作ってみよう。

「具を変えるのか？」

「そう。前世ではお米に合うものならなんでも入れていたな。懐かしい」

時間に余裕がある平日の朝は、渚はお弁当を作っていた。基本はおにぎりで、具は昨夜の残り物を適当に詰める。甘い玉子焼きやウインナー、角煮や唐揚げは当たりの日。

何もなければ、ふりかけ味。ヒジキの煮物やほぐした焼きサンマなんかも、意外と美味しかったのを覚えていた。

炊き込みご飯や炒飯^{チャーハン}、赤飯の余りをそのまま握っていったこともあった。

「サンドイッチ以上に懐^{なつ}が広い食べ物なのよね。おにぎりは」

「奥深いな、おにぎり……」

よく分からないなりに、エドは神妙な表情で頷^{うなづ}いている。美味しければなんでもいい、と思っているのは明白だったが、同意見なナギも重々しく頷^{うなづ}いてみせた。

「私たち元日本人のソウルフードだからね」

「アキラが言っていた、シグレニ？ 俺も楽しみたい」

「うん。……とはいえ牛肉の在庫はないから、鹿肉でもいいかな？ 赤身のお肉だから

合うと思うんだけど」

「ブラックブル……」

「残念ながら、もう食べ尽くして在庫は皆無です」

エドは悲痛な顔で肩を落とした。その切なさ、とてもよく分かる。ブラックブル肉は、特選黒毛和牛ブランド並みに美味しいお肉だったのだから。

二人がこの高級魔獣肉に味を占めたのは、ナギが辺境伯邸の食糧庫からこっそり持ち出した、とっておきのお肉を口にしてからだ。

食糧庫の、更に奥の隠し部屋に吊るされていた綺麗な赤身肉を見逃すナギではなかった。

蕩けるような柔らかい肉の美味しさは格別で、二人は何かと「記念日」を見つけては、ブラックブル肉に舌鼓を打ったものだった。

ブラックブル肉のステーキ、ローストビーフ。すき焼きにしても美味しかった。

塊肉はあつという間に食べ尽くしてしまい、二人はしばらく悲嘆に暮れて過ごしたものだ。

ブラックブルはB級魔獣で、広大な平原やダンジョンの下層に生息している。売りに出されるのも稀で、ギルドに卸されたとしても、すぐに買い手がつからしい。つまり、二人がブラックブル肉を手に入れるには、ダンジョンに潜るしかないのだ。「早く冒険者に昇格してダンジョンに行くぞ、ナギ」

「あ、はい」

今までにない迫力の少年に、気圧されたナギはこくこくと頷いた。恐るべし、お肉の力。だが、ブラックブルの肉を大量に確保しておきたいのはナギも同じ気持ちだ。

ブラックブル肉がたくさんあれば、しぐれ煮はもちろん、牛カツだって作り放題。

ミディアムレアの焼き加減でステーキにして味わうもよし、しゃぶしゃぶにしても、きつと美味しい。

部位によっては生でも食べられると聞いたので、牛刺しやユッケでも食べてみたかった。

「早く評価を上げなくてはな。行こう、ナギ。途中に薬草の群生地を見つけておいた」

「エドがいつになく本気だ……」

いつもクールな彼が、ブラックブルのしぐれ煮おにぎりに惑わされている。

アキラの記憶がよほど心に残ったのだろう。

「じゃあ、採取を頑張るね」

「俺は引き続き、毒蛇を捕まえてくる」

本気を出した狼獣人の嗅覚は凄まじく、薬草の群生地をいくつも見つけ出してくれた。根こそぎ取り尽くさないように気を付けながら、ナギは黙々と薬草を摘む。エドは採取の傍ら、弓で獣を狩ったり毒蛇を捕まえたりと忙しそうだ。

レベルを上げるために、ナギも時折、魔獣を仕留めた。少し離れた場所から【水魔法】や【風魔法】で攻撃する。スライムを見つけた時だけは、短槍で攻撃した。

そうしてせっせと頑張ったおかげで、この日ナギのレベルはひとつ上がった。

夕刻は、冒険者ギルドが一番混雑する時間帯だ。

ダンジョン帰りの冒険者たちが受付に長蛇の列を作るため、ナギとエドは少し早めの時間帯を狙ってギルドに戻るようにしている。

人の少ないうちにと、さっそく買い取りカウンターに並んだ。

カウンターいっぱい、収納から取り出した薬草を並べていく。

「こっちが薬草です。ちゃんと種類別に分けています。で、これがスライムの魔石。あと、フォレストボアの毛皮と魔石。ボアの牙も買い取ってもらえますか？」

「おう。ボアの牙は錬金術の触媒になるから、買い取り対象だ。そっちの坊主は蛇の買い取りか？」

「ん、ちゃんと生きたまま捕獲してきた。八匹いる」

「おっと、ここで袋を開いてくれるなよ？　裏の倉庫で袋の中身を確認する。ナッツクッキーの坊主も、売り物全部持つてこっちに來な」

「ナッツクッキーの坊主……？」

そういえば、素材買い取り担当のこの職員にも、残業のお詫^わびにとクッキーを差し入れていた。ギルド職員というより冒険者と言われたほうがしつくりくる、体格のいいクマ族の獣人だ。

こちらを覚えてくれていたのは嬉しいが、そのネーミングセンスは微妙だと思う。

「ナギです。こっちはエンド」

「おう、そうか。俺はガルゴ。よろしくな」

クマの獣人おじさんは迫力のある巨体だが、意外にも優しい目をしている。

「ガルゴさん。よろしくお願いします」

「よろしく」

エンドと二人で軽く頭を下げると、大きな手で頭を撫^なでられた。ナギは慌てて帽子を押

さえる。

「支払いも裏でしてやろう。お前たちは、ちっと規格外な連中みたいだしな」

大雑把そうに見えるが、気遣いもしてくれる。いい人だなと思う。【鑑定】のひとつ、人物鑑定の結果もピカピカの青——危険度やこちらへの警戒度が極めて低いことを示していた。フェロー主任、受付嬢のリアに続いて、信頼できる人と出会えたようで嬉しい。

（甘いお菓子が好きなら、次は蜂蜜たっぶりの焼き菓子でも差し入れてみようかな）

二人は大きな背中を追ってギルドの倉庫へ向かった。

査定を終えて、葉草はまとめて銅貨六枚、毒蛇は一匹が銅貨三枚、合計で銅貨二十四枚分の報酬となった。

それから、フォレストボアの毛皮と牙、魔石、スライムの魔石が、合わせて銀貨一枚と銅貨五枚だ。

毛皮はその鮮やかな色彩が上流階級に人気らしく、傷もない良品だと査定された。

銅貨十枚で銀貨一枚なので、総合計、銀貨四枚と銅貨五枚がその日の二人の報酬だ。早めにギルドを撤収したため、今日は時間に余裕がある。

二人は市場を冷やかしながら、宿への道をのんびり歩いていた。

目についた新鮮な野菜を買いつつ、ナギは本日の報酬について思案する。
 「薬草採取だけだと、やっぱり厳しいわね。毒蛇の捕獲は稼げそうだけど、エドにばかり負担がかかっちゃう」

「薬草採取を基本にして、合間に獲物を狩れば、それなりに稼げそうだが」
 討伐依頼はまだ請けられないが、狩った獲物の素材はギルドに引き取ってもらえる。肉は自分たち用に確保しておくつもりだが、他の素材や魔石の買い取り額は悪くなかったように思う。

「宿代の銅貨五枚を差し引いても、充分生活できそうね」

薬草採取だけではその日の宿代の支払いが精一杯だが、魔獣を倒せば食糧が手に入り、プラスで素材が売れる。見習い期間はとりあえず、そんな風にして稼ぐのが得策に思えた。
 「だけど、街中の奉仕依頼もある程度こなしてポイントを稼がないと、冒険者とポーターに昇格できないのよね。こっちは安全だけど、依頼料がかなり少ないのが痛いわ」

「街中の仕事と採取を交互に請けるか」

「それが良いかな。毎日森に通うのは疲れるし、街中依頼で体力を温存しよう」

そんな訳で、街中と街外の仕事を一日ずつ交互に請けることが決まった。

街中仕事は旨味は少ないが、地理を覚えられる。

狭い路地の奥にあるもの珍しい雑貨屋や美味しい屋台を見つけることができるし、街の人とも親しくなれるので、悪いことばかりではない。

（もしかして、ずっと探しているスパイスのお店が見つかるかもしれないし！）

ファンタジー世界ならではの、わくわくするような素敵なお店との出会いも期待できるのだ。

「どうせなら、お仕事も楽しみたいとね」

「楽しく、は分からないが。旨い屋台を見つけれられるのは、たしかに嬉しい」
 揺るぎないエドの発言にナギは小さく噴き出した。

そういうえば、もうすぐ夕食の時間だ。たくさん働いたので、お腹が空いている。

「エドは晩ご飯、何が食べたい？」

「今日狩ったフォレストボアが食べたい」

「ボアか。角煮はちよつと面倒だから、ボアしゃぶはどう？」

サシ入りのお肉からナギが連想したのは、しゃぶしゃぶだ。

こころばらく揚げ物や焼き肉が続いていたので、今日はさっぱりしたものが食べたい。
 「なんとなく記憶はあるが……味の想像がつかないな」

「そうだなね……。えつと、作るのは冷しゃぶかな。もう少し涼しくなったら普通のしゃ

ぶしゃぶも食べたいけど、ここは南国だし。さっぱりして食べやすいから、夏のメニューには最適だと思うの。タレのポン酢は醤油とレモンで作れるし。うん、今夜はボア肉の冷しゃぶにしましょう！」

「レモン……さっぱり……？」

物悲しそうな琥珀色の瞳に気付いて、ナギは笑ってしまふ。

肉食男子にさっぱり系は、切なくなるか。さっぱりしている分、つつい食べすぎてしまうほどに美味しいのが冷しゃぶなんだけれど。

「エドにはこつてり系のお肉も必要かな？ 他にも肉料理を用意するから、楽しみにしてね」

「分かった。俺はナギを信じている」

「うん、ありがたいけど、ちょっと重いかなー？」

軽口を叩きながら歩いているうちに、宿に到着した。

庭で水やりをしていたミーシャが二人に気付き、ほんのりと口角を上げる。

「おかえりなさい」

「ただいま、ミーシャさん」

煉瓦の壁に鳶つたを這わすアイビーは美しいが、世話は大変そうだ。庭にはプランターも

置かれており、可愛らしい花が咲いている。

日陰に繁っているのはハーブの一種で、緑の中心に立つミーシャの姿は神秘的なエルフそのものだ。ナギはついうつとりと見惚みとれてしまふ。

ミーシャのほっそりとした指先がハーブを摘む。そして淡い紫色の花が咲いたそれをナギに手渡してくれた。鎮静作用があるのか、とても良い匂いにする。

「今日の夕食は何を作るのですか？」

翡翠色の瞳の奥に抑えきれない好奇心を見て取って、ナギはくすりと笑った。

「今夜はエドが狩ってくれたフォレストボアを調理する予定です」

「フォレストボア。甘くて柔らかいお肉の……？」

「えっと、はい。普通のボアよりも柔らかい肉質らしいですね」

「そう。とても柔らかい。臆病だから、なかなか狩れない子のはず。彼は優秀な狩人ですね」

「エドの腕前はすごいんですよ！ 大きなクマの魔獣だつて弓で倒せるんですから」

「ナギ、もういいから」

頬をほんのりと赤らめたエドに止められて、ナギは洪々彼の武勇伝を語るのを諦めた。そんな二人の様子に、ミーシャは楽しそうに瞳を細めている。

「仲が良いのは素晴らしいこと。今日も怪我なく、二人が帰ってきてくれて嬉しいです」

「ミーシャさん……」

白い織手が頬を優しく撫でてくれる。草花の馨しい香りが鼻腔をくすぐった。ついでにエドの頭もふわりと撫でて、ミーシャは軽やかな足取りで宿の裏口に向かう。警戒心の塊の、狼獣人の頭を撫でるとは。

ナギがそつと横目で見ると、エドは呆然と立ち尽くしていた。悪意も下心もなく、まるで柔らかな風のようなエルフには、さしものエドも不意を突かれてしまったのか。

（私は綺麗な女の人に優しく撫でられて、嬉しかったけれど）

あんな風にナギが優しく誰かに触れてもらえたのは、母が生きていた頃だけだ。

母と乳母、侍女の三人。彼女たちに優しく頭や頬を撫でられた、アリアの記憶がある。慈しむように温かな指先に触れられて、良い匂いに包まれた少女は幸せそうに笑っていた。

（エドも嫌な気分ではなさそうだけど、戸惑いのほうが大きいのかな？）

物心がつく前に母を亡くし、ずっと父親と二人きりで暮らしていたという彼には、初めて感触だったのかもしれない。

「エド、部屋に戻る？」

「ああ」

「ミーシャさん、いい匂いがしたね？」

「……………」

ほんのりと頬を染めた不意そうなエドと部屋に戻り、楽な服に着替えた。

汗や汚れは【浄化魔法】で綺麗にしてある。

色違いで作ったお揃いのエプロンをそれぞれ装着して、二人は宿のキッチンに向かった。

肉を切るのはエドに任せ、しゃぶしゃぶ用に薄切りにしたものその他にもいくつか小さなブロックに分けてもらう。

エドに頼み込まれたので、結局、フォレストボアの角煮も作ることにした。

角煮は時間がかかるので最初に仕込む。急いで下拵えを済ませ、大鍋ごと薪ストーブの上で煮込み始めた。

煮込む間に別の作業を進めたいが、冷しゃぶはさつと湯がいて冷やすだけだから、これは後回し。

大皿いっぱい、今日の市場で仕入れたレタスを敷いて、トマトで彩る。

スープは豚汁風のボア汁にした。根菜類をたっぷり投入し、ボアの端切れ肉を使う。味噌がないので、醤油味。仕上げにバターをひと欠片、隠し味にする。

この寸胴鍋いっぱいポア汁にうどんを入れて、今夜の主食にするつもりだ。
「あとは、肉巻きポテト。バターと照り焼きの風味が最高の相性なのよね」

前世で使っていたのは豚の薄切り肉だが、レシビは同じでいいだろう。

細く拍子木切りにしたジャガイモをフォレストポアのパラ肉で巻き、たっぷりのバターで焼く。あとは、少し甘めの照り焼きソースを加えて仕上げるだけの、簡単なレシビだ。味が濃いため、ビールのツマミにはもちろん、翌日のお弁当にも最適メニュー。

これはランチ用にしようと、大量に作って大皿に取り分けておく。

「こんなものかな？ 角煮はもう少し時間がかかりそうだし、先に冷しゃぶを作っちゃおう」

食堂にお皿を運ぶのはエドに任せて、ナギは大量の薄切り肉をたっぷりのお湯で湯がいていく。あいにく昆布はないので、乾燥キノコで取った出汁だしを使った。

さっと湯がいた肉を氷水で冷やして大皿のレタスの上に盛り、作業の合間に作った、ボン酢風のタレをたっぷりと回しかけた。

大森林産レモンと醤油、オリーブオイルを合わせた、美味しいドレッシングだ。

(いい匂い。ごまが見つかったら、ごまドレッシングも作りたいな)

大皿五枚分の冷しゃぶを【無限収納EX】インベントリに収納してテーブルに向かう。

二人で一皿ずつ食べて、残りは念のためのおかわり用だ。余れば作り置きにするつもりで、たくさん作っておいた。

食堂の空いていたテーブルの隅っこに夕食の皿を並べ、互いの大皿がぶつからないよう斜め向かいに座る。

メインの冷しゃぶ大皿、ポア汁に肉巻きポテト。角煮はまだストープ上で煮込み中だ。

「じゃあ、食べようか」

「いただきます」

待ちかねた様子のエドがフォークに突き刺した肉を口に放り込む。脂身の多いフォレストポアだが、しゃぶしゃぶならさっぱりと食べられるはず。

ナギも肉とレタスをフォークに刺して口に入れた。

二人きりなら箸を使うのだが、あいにくこの世界ではまだお箸を見かけたことがないため、人前ではフォークを使っている。

お手製ボン酢はまるやかな味に仕上がっており、ポア肉によく馴染んでいた。

「美味しい！ いくらでも食べられそう」

「旨い。さっぱりしているが、手が止まらなくなるな、コレは」

無言で冷しゃぶに向かっていたエドの大皿はもう空からに近い。